

# 「こんなこと知っていると、ジャズがもっと楽しくなる」

ジャズミュージシャン

佐藤 洋祐

## 1、はじめに

### 📌 習い事で学ぶ人生の「道」

きょうの講演のタイトルは「こんなこと知っていると、ジャズがもっと楽しくなる」となっていますが、楽しむという行為にはさまざまな形があると思います。頭で考えながら理性的に楽しむとか、逆に直観的に楽しむとかですね。このうち、直観的に楽しんでいる方には「知っていると楽しくなる」という知識は必要ないかもしれません。何かを知ったりすることで、楽しみ方の可能性が阻まれることがあり得ると思うからです。とはいえ、演奏者の視点による音楽の捉え方や感じ方を認知してもらうことによって、音楽の受け取り方が変わるかもしれないと願いながら講演したいと思います。私はジャズという音楽を少しでも多くの方に、より深く、より広く、より身近に楽しんでもらうことをライフワークにしています。この講演の後に、みなさんが聴く音楽の中に何か変化を感じたかどうか、ご自身で俯瞰してもらえたら幸いです。

今回のお話は以下の3つのテーマに絞って話を進めていきたいと思います。①すべての存在、事象はこの世で関連していること②すべての行い、言動には必ず計らいが含まれていること③様々な文化の多様性を認め合うこと。音楽と関係のない内容だと思われるかもしれませんが、日本では様々な習い事に「道」という字がつくことが多いですね。華道、茶道、剣道、柔道などです。習い事を通して人生の「道」を学ぶということが、習い事の本来の目的だからです。音楽についても、これら3つのテーマと結びついていると信じています。

## 2、ジャズは対等な各パートの織りなす対位法的音楽

まず弘法大師の詩を紹介します。

六大無碍にして常に瑜伽なり 四種曼荼おのおの離れず  
三密加持して速疾に顕わる 重重帝網なるを即身と名づく

### 📌 反映を繰り返していくセッション

私は東京都足立区六月で生まれましたが、生家のすぐそばにある炎天寺というお寺の住職が、私の演奏を聴いてこの詩を教えてくださいました。まず「六大無碍にして常に瑜伽なり」ですが、この世界を構成する六大、即ち地・水・火・風・空・識は遮るものがなく、永遠に融合し合っているとの意味だそうです。次の「四種曼荼おのおの離れず」は、4種類の曼荼羅は様相の異なる真実を表しており、互いに離れることはないという意味。「三密加持して速疾に顕わる」の「三密」とは「身、口、意」、即ち思ったこと、口にしたこと、行ったことが互いに影響し合っているの、速やかに悟りの世界が現れるということを表しています。最後の「重重帝網なるを即身と名づく」は、この世界のあらゆる生き物の体が、帝釈天の持つ網につけられた宝珠のように幾重にも重なりあって、万華鏡のように映し合っていて、それが即身、すなわち悟りだということだそうです。

これをジャズの世界に例えると、誰かが演奏した音が、別の演奏者の出す音や心に反映していく。あるいは、聴いている人が何かを感じた時に、演奏者がその場の空気を感じ取って、演奏に反映されていくということだと思います。ジャズの大きな特徴の一つは、演奏する各パートのどれがメインで、どれが脇役だということがないということです。それぞれが重要な役割を担い、互いに影響し合いながら音楽を作っていきます。歌謡曲の場合、美空ひばりの伴奏者は彼女の歌を立てるのが役割ですが、ジャズは各パートの全員が「主」であり「従」で、全員が対等なのです。

ここで佐藤氏はキーボードを使い、ドラムス、ベース、ピアノ（伴奏、メロディ）の4パートをそれぞれ録音しながら、各パートの関係性についての解説を試みる（左下写真）。

### 👉 冷酷にリズムを刻むドラムス

まずドラムスですが、その役割はタイムキープです。時の流れと同様に一定のリズムを刻んでいきます。ある意味、とても冷酷な仕事とも言えます。あらゆる生き物は時とともに死に近づいていきますが、ドラムスはそんなことにはお構いなしに、リズムを刻み続けなければなりません。温情をかけて



遅らせたりしてはいけないのです。人間の作るリズムのことを律動とも言いますが、「律」のヘンは道、ツクリは筆を表しています。つまり「律」は人間が生きていく時の規範になるものという意味です。自分が好きなようにやるものではないということですね。極端な話、ドラムスのそばで誰かが倒れたとしても、それを横目で見ながら、ちゃんと冷酷にリズムを刻んでいくでしょう。ドラムスがリズムをキープしてくれるからこそ、メロディを担当する人は安心して、ゆったりとメ

ロディを歌うことができます。メロディが遅れ気味だから合わせてあげようかと思って、ドラムスがリズムを遅らせると、その曲はずっこけてしまいます。リズムが冷酷に刻まれていてもドラムスが冷たく聞こえないのは、温かみのあるメロディが絡むからでしょう。

キーボードのリズムを1分間に165回にして、まずドラムスの音を打ち込んで録音した。その際、ただトン、トン、トンと機械的に打ち込むのではなく、トント、トント、トントと、弾みながらスキップするように打ち込んだ。

ドラムスはただ時計のようにリズムを刻むのではなく、時を前に進めていく、つまり推進力をつける役割も担っています。リズムという英語のもともとの意味は「ゆがみ」だそうです。リズムをゆがませ、実際の時の流れにはないうねりを作っていくことによって、聴いている人は推進力を感じ、体が勝手に動いてしまうのです。それをジャズでは「スイングする」と言ったりもします。

### 👉 ドラムスより強いベースの推進力

次にベースを打ち込みますが、低音部に関する、音の科学的な話をしましょう。ドの音を弾くと、ピタゴラスが発見した自然倍音列によって、その上のソ、ド、ソ、ド、ミ、ソ、シなどが同時に鳴るのです。実際には聞こえにくいですが、必ずこれらの音が含まれます。そして人間は、下から上に和音を積み上げる文化を作ってきました。また、それぞれの生き物には可聴音域というものがあります。人間の場合、ある音より低い音域や、逆にある音より高い音域は聞こえません。可聴音域は生き物によって違うので、例えば人間には聞こえなくても犬には聞こえる場合もあります。

ジャズにおけるベースほど低音部が動き回る音楽はありません。ベースはドラムスとともにリズムを担当していますが、推進力をつける役割はドラムス以上に強いのです。どうしてでしょうか。以下は私の推測ですが、ドラムスは打った瞬間に音が出るのに対し、ベースは弾いた弦が戻る時に音が出ますから、ドラムの音より若干遅れる。なのでベースの人は少し先に弾くようになり、これがいい感じに推進力を生むのだと思います。

先にキーボードに録音したドラムスの音を鳴らしながら、ベースの音を打ち込み、録音していく。話にあった通り、ベースの音はドラムスに合わせて動き回った。しばらく打ち込んでから両方の音を鳴らしてみると、小気味よい推進力が醸し出され、佐藤氏もOK出しをした。

### 👉 伴奏はメロディとリズムの橋渡し

次はピアノの伴奏を打ち込みます。メロディの場合は急に始まったり止まったり、舞い上がったり落ちたりしますが、伴奏は激しく動かしません。動きすぎるとメロディが聞こえなくなってしまうからです。和音の一部だけを動かしたりして、薄い下地を作っていく感じでしょうか。ピアノ伴奏はリズム楽器としての側面も持っていて、メロディとリズムの橋渡しのような役割を果たします。伴奏が入ることによって、メロディにパワーを与えるんですね。

録音したドラムスとベースの音を鳴らしながらピアノの伴奏パートを打ち込んでいく。伴奏の音は一定のリズムでは演奏せず、半拍食ってシンクペーションにするなどして、うねりや推進力が生み出されている。ドラムス、ベース、ピアノ伴奏を一緒に鳴らしてみると、佐藤氏も「なかなかいいじゃないですか」とご満悦の様子。

### 👉 羽目を外してもいいメロディ

最後はピアノによるメロディです。リズムは冷酷に進んでいくと言いましたが、メロディというのはその対極で、いろんな表情をつけながら人の情感を表していきます。ビブラートをかけてみたり、ためてみたり、急に終わってみたり。言い換えれば、逸脱しても、羽目を外してもいい。いやむしろ、それが期待されているパートとも言えるでしょう。

ドラムス、ベース、ピアノ伴奏が合奏する中、トランペットの音色で「聖者が街にやってくる」のメロディを打ち込む。テーマに続いてアドリブも入れていくと、かなりジャズっぽくなってきた（ここで拍手）。

こんなふうに、それぞれのパートが支え合い、影響し合いながら、しかもそれぞれが独立した意思で自分なりに演奏していきます。一番目立つメロディに注目するのは簡単ですが、そのメロディにしても各パートに影響されながら成り立っているのです。

## 3、ジャズは演奏者、そしてリスナーとの非言語的コミュニケーション

### 👉 音の背景にあるたくさんの意思

ここで画家の竹内栖鳳さんの言葉を紹介します。「わが国の絵画は昔から<写意>という事を大事にしてきたが、ヨーロッパ美術においては<写実>を追究し続けた末に、現在ようやく<写意>という事を重要視するようになった。その点では現在、日本とヨーロッパは共通している」

絵を描く対象物として例えば猫を見た時、画家が「背中丸みが何て可愛いだろう」と感じ、実際の猫より丸みを帯びさせて描く。あるいは葛飾北斎が女性の衣を見て「何というスピード感があるだろう」と感じ、筆をS字に走らせたりする。彼らは初めからそっくりに描く気はないんですね。そうして描かれた絵から読み取れる画家の意思を<写意>というのだと思います。

音楽においても、実際に演奏されている音の背景には、すごくたくさんの意思がこもっています。すべての音に意味がある、意思があるから音が出ていると考えてもらえたらと思います。意思がないなら音が出ていなくてもいいとも言えます。そんなことを説明するために、ライブのビデオを上映します。演奏者同士のやり取りが分かりやすいものを選んできました。

上映されたのはダイアナ・クラールが率いるカルテットによる 2001 年のパリ・オランピア劇場におけるライブ映像。曲目はイースト・オブ・ザ・サン。メンバーは、ピアノ・ボーカル＝ダイアナ・クラール、ベース＝ジョン・クレイトン、ドラムス＝ジョン・ハミルトン、ギター＝アンソニー・ウィルソン。さきほどのキーボードを使った「ピアノトリオ」でもスイング感があったが、一流ジャズメンの演奏が生み出すグルーブ感や推進力はまるで違う。自然に体が動き、リズムを刻まずにはいられない。生身の人間が醸し出す心地よいリズムは、時代をまったく感じさせない。コロナのおかげで生演奏が聴けなかったのは本当に残念だ。

## 🎵 ベースに引き継ぐいろんなサイン

このビデオはコンサートの1曲目です。緊張感が漂う中、観客から拍手が起き、ピアノがおもむろにイントロを奏でます。この部分には楽譜があり、アドリブではなく決められたフレーズを弾いています。イントロに続いてテーマに入ると、また拍手が起こり、クラールさんが少しだけ笑みを見せます。観客がこの曲を知っていて、さらにジャズやクラールさんが大好きなんだなと感じて、安堵の表情を浮かべたのでしょうか。でも観客は曲を静かに聴きたくて拍手をすぐにやめます。

この曲は前半が16小節、後半が20小節の計36小節から成っています。前半の8小節が終わったところで、クラールさんは歌い方をリズムミカルに変えます。型にはまらない、言うならば不良っぽい歌い方です。前半の小さな盛り上がりを作ろうということですね。それに呼応して、それまではおとなしく伴奏していたギターが合いの手を入れてきます。

17小節からの後半に入っても、クラールさんは演奏スタイルをあまり大きく変えようとはしません。ここでほかのメンバーたちは、最初のソリストはベーシストになるだろうと感じ取っているはずです。なぜかというと、クラールさんは静かに原曲（テーマ）を終えようとしているからです。ベースのソロというのは必然的に音量が下がりますから、音量が上がった状態からベースソロに入ると、トーンダウンして失速した感じになってしまうのです。つまり、クラールさんが音を落とし続けているのは、ベースに引き継ごうとするためのメッセージというわけですね。初めからソロの順番を決めておく場合もありますが、今回はそうではないと思います。というのも、クラールさんは音量を落とし続けたのに加え、引き継ぐ寸前にベースのほうにちらっと顔を向けているんです。



ピアノ・ボーカルのダイアナ・クラールやドラムスのジョン・ハミルトンらのライブ映像を流しながら解説する佐藤氏

## 🎵 フィルや慣用句で意思の疎通

その瞬間、ベーシストのジョン・クレイトンさんが弓を引き抜くのが映っています。ベースの演奏というのは、弦を弾いたり、弓を引いたりしますが、彼はこの状況では弓がいいと思ったのでしょうか。ピアノからベースに移る時に、少しだけ音のない隙間がありました。ここでドラムスのジョン・ハミルトンさんが「スカタ、スカタ」と隙間を上手に埋めています。これをフィルと言いますが、おかげでクレイトンさんはタイミングよく、安心して弓を引き抜くことができました。静かで小気味よいフィルで引き継ぎを手助けしたのも、セッションならではの気遣いということですね。

ベースソロが始まった直後に、ピアノが「ちょんちょん」と合いの手を入れています。これはジャズの長い歴史の中で何回も演奏されてきた慣用句のようなもの。「ヤマ」と言えば「タニ」と応じるような感じですね。それを互いに演奏し合うことで、「お前分かってるね」と意思が通じる。入れたほうも、入れられたほうも、安心感が生まれるというわけです。ベースが、やはり慣用句と言えるフレーズを引いた時、クラールさんが「ああ〜」と小さくうなり声を上げているのがかすかに聞き取れます。「あんたやるね！」というところでしょうか。

## 🎵 あえておおらかに歌わない？

ではベースソロをじっくりと聞いてみましょう。クレイトンさんが自分の意思を分かりやすく伝えているのが分かります。メロディ楽器は本来、おおらかに歌うものなのですが、彼は全然おおらかに歌っていません。リズムサイドの人のリズムの取り方で、テンポをあまり遅くしないで歌っている

のです。というのも、ベースの弦を弾いて醸し出される強力な推進力が不在の中、メロディがあまりにもためていいソロを歌うと、リズムが後ろに引っ張られてしまうので、彼はあえてそうしなかったのだと思います。だからちょっと滑稽に、可愛らしくさえ聞こえます。これから盛り上がっていかうとする時に、ここでテンポが遅れてはまずいと考えたのでしょう。ここでドラムが茶化すように「ピシッ、ピシッ」と合いの手を打っています。クレイトンさんに「俺がいるから遅れないよ。大丈夫だよ」と言おうとしたのか、それとも「グッジョブ」とエールを送ったのか分かりませんが、明らかに何らかのメッセージですね。それを聞いて、ピアノとドラムが目を見合わせて笑っています。こういうやり取りというのは、敬意と愛情にあふれたものです。コンサートの1曲目をいい形で演奏したいという互いの思いの発露ですね。

### 👉 クライマックスへ全員イケイケ！

ベースソロが終わりギターソロが始まりました。ベースが弦を弾くリズムセクションに戻ってきたので、推進力がガラリと変わりました。観客もそれを感じて乗ってきます。演奏者と観客との交流ですね。ギターのアンソニー・ウィルソンさんは、リズムに身を委ねて気持ちよさそうにソロを取っています。ソロの1周目が終わるところから、ウィルソンさんは目まぐるしく早いパッセージも織り込みながら、自由奔放なアドリブを繰り出していきます。それに呼応して、ベースが弓を鞘に戻して弦を弾き、「さあ行こうか」とばかりに鼓舞します。同じ時、ピアノも一瞬、弾くのをやめ、2周目のアタマで全員がドンと同時スタートしました。セッションならではの醍醐味ですね。

### 👉 ドラムの大事な役割は演出

2周目のギターは音の数もぐんと増え、跳ねるような歌い方をしています。よりハードにスイングしている状態です。ドラムはブラシをスティックに持ち替え、より強い音を出します。シンバルに対しては、音量を上げずにスピードを出すため、スティックを斜めに当てるテクニックも使っています。クライマックスに向け、もうみんなイケイケです。ドラマーはタイムキーパーのほかに、演出家としての大事な役割を持っています。というのもドラムはこの4人の中で、ダイナミックスの幅が一番大きい楽器だからです。一番小さい音から一番大きい音まで出せるので、いろんなやり方で演奏を演出することができるのです。

### 👉 相手を認めコミュニケーションが始まる

彼らの音や仕草に込められたメッセージを、どう受け止めるかは人それぞれだと思います。これまでの説明は私の推測に過ぎないので、彼らがその通りに感じているかどうか分かりません。みなさんがどう感じたのかも分かるわけがありません。でもそれこそがコミュニケーションだと思うのです。それぞれの感じ方や受け取り方が違った時にも、相手の立場、考え方、感性を敬意をもって認めるのが大事だと思います。考え方が違う相手のことを認めなかったら、コミュニケーションはスタートしません。世界には音楽が禁止されている国もあります。こちらで美德とされていることが、あちらではやってはいけないことだってある。その時に「あの人たちはおかしい。話にならない」と言ってしまうたら、その時点でコミュニケーションは終わりです。そして、それぞれが自分の意思を持っていることが、コミュニケーションを図る上で本当に大事なことだと思います。意思の疎通をするためには、言葉以外でも音楽とか、ボディランゲージとかでも可能であり、かえってそっこのほうが強力ということもあるかもしれません。音楽によって言葉では伝えきれないこと、例えば情感などを伝えることもできることを感じ取っていただけたらと願います。

### 👉 ジャズに正解なんてない

そうは言いながら、私が誰かにジャズを教えようとする時、「そうじゃないよ。間違っているよ」と言ってしまうことがあるんです。まるでジャズに正解があるように振る舞う。経験を積むほどそうなりがちなんです。商業音楽をやっていて、見栄えのいい、心地よい音楽をやらなきゃいけないと思ったりしていると、そういうことが出てきてしまうんですね。でもそれは音楽の本当のポイントではなく、それぞれの意思のもとに音を出すことが大事なのです。その結果、美しい音が出ているかどうかは本来のポイントではありません。プロミュージシャンだからいいということはない。私がそれを

感じるようになったのは、アメリカで活動したことがきっかけでした。そして、私はいつもそれを自分に言い聞かせているのですが、なかなか難しいです。

#### 4、彼らの音楽は生活の延長である

##### 👉 貧乏じゃなきゃいい絵は描けない

千葉にもゆかりのある画家の田中一村さんが、対談した中で語っている言葉を紹介します。

「刷り込み作業の日給が 450 円と安いのが大変気に入ったからでございます。貧乏でなければ、いい絵は描けないものでございますから。また、芸術というものは常に真剣な姿勢で臨まなければいいものはできません。まして満足できる作品などは全身全霊で行っていてもできるかどうかは保証できません」

田中さんは最後は奄美大島の紡ぎ工場働きながら絵を描いていました。ある程度お金がたまったら、絵を描く時間ができたと言って創作活動をするという生活ぶりでした。

彼が「どうして働いているんだ」と聞かれた時に、「日給が安いからいいんだ」「貧乏じゃなきゃいい絵は描けないからね」と言ったんですね。音楽にせよ絵にせよ、アートとそれを生み出す人の生活とは深くかかわっています。私はひょんなことから日本でジャズが好きになり、レコードを聴いたりしていたのですが、いつも不思議に思っていたのは、「僕の好きな 1950 年代～60 年代のジャズと、今テレビで流れてくるジャズがこんなに違うのはなぜだろう」ということでした。その一端を分かってもらうために別のビデオを上映します。

1 本目はアートブレーキーとジャズメッセンジャーズによる 1958 年のベルギー・ブリュッセルでの演奏。2 本目は 1985 年のニューヨーク・タウンホールでの、同じくジャズメッセンジャーズの演奏。曲目はいずれもモーニン。1 本目はモノクロ、2 本目はカラー。

##### 👉 同じバンドとは思えない変容

同じバンドの演奏なのに、両者の雰囲気は全く違ったのが分かったと思います。1 本目を見て思ったのは、こんなに派手な曲を演奏しているのに、なんで演奏者がみんな暗いんだろうということでした。全然楽しそうじゃない。音も輝かずに鈍く光っている。片や 2 本目はメンバーが笑っていて楽しそう。喜びにあふれている。音も明るく、輝いている。違う音楽だと思うほどでした。

同じ人が同じように演奏しても、時代によって音が変わってくる。彼らの音楽が、作ったものではなくて彼らそのもの、彼らの生活の延長上に音があるから、彼らの自己表現だから音が変わるんですね。私は渡米した最初の日、彼らの生活が音楽とともにあることを実感しました。

先のベルギー・ブリュッセルの同じ劇場で、佐藤氏がサクスを演奏しているビデオも上映

#### 5、最後に

##### 👉 国際交流に必要なものとは？

最初に提示した 3 つのテーマを振り返ります。①すべての存在、事象はこの世で相関していること②すべての行い、言動には必ず計らいが含まれていること③様々な文化の多様性を認め合うこと。

それぞれが全部影響し合っているということを音楽で言えば、出した音は必ず何かに反映されるということです。私たちの生活の中でも同じで、例えばパソコンでの作業にしても、遠く離れた知らない人が作ったもののおかげですね。私たちより前に生きた人たちののおかげで、私たちの存在があります。自分が嫌いだと思っている人が作った何かで生きているということもあるでしょう。異質なものと共存しているということ、私は音楽を通して知りました。

## 🔑 自分を持っていることが一番大事

国際社会での交流に何が必要かという、語学力なんかではなく、自分のこと、自分の文化を良く知り、自分を持っていることが大事です。言葉は後からついてきます。いまは違いを認め合ういい時代になってきたと感じます。そして私はいつも、もっといい時代にして次の世代に渡すんだと思いつけています。それが音楽家としての役割だと思うからです。

### 【質疑応答】

Q お話を聞いて、ジャズは人生修行なのかなあ、そんなに難しく考えながら聞かなければならぬものなのかなあと思ったのですが。

A アートというものは、ものを知っているために楽しみ方が制限されてしまうことがあると、最初にお話ししました。何も考えずに、素直に、直観的に楽しむことが、アートの一番の醍醐味だと思います。今回はミュージシャン視点から、こんな考え方、聴き方があるといったお話しをしましたが、それが想像力の翼を制限してしまうかもしれないと思う一方で、「なるほどな」思っただけだったらうれしいという願いもありました。決してみなさんに苦を課したくて話したわけではありませんので、もし負担に思われたら全部忘れて下さって結構です。

Q 人種差別の激しかったアメリカで、ジャズはどうして短時間のうちに白人社会の共感を得て、広まっていったのでしょうか。

A 先ほどのアートブレーキーとジャズメッセンジャーズの演奏のうち、最初の 1958 年の時はまだまだ差別が強かった時代です。私の想像として言えば、彼らは白人に向けて演奏していたはずですが、自分たちが楽しそうに演奏したら、白人たちは不快な思いをするだろうから、ストイックな音を出さなきゃならないという思いがあったでしょう。同じころ、ニューヨークのクラブで演奏していたマイルス・デイビスが、休憩時間に表に出た時、白人警官に頭を殴られ流血している写真が残っています。でも、彼らが音をいくら抑制していたとしても、破壊力があるのは間違いないと思います。嘘のない音楽だし、うまく演奏しようなんて全く思っていない。許される範囲ではっきりと自己主張していたはずです。こそこそせず、思いつきで咆哮していたのです。それが生み出す破壊力こそが、白人社会にも受け入れられた大きな理由ではないでしょうか。

お断り 今回の講演では佐藤氏のサクソにピアノトリオを加えたカルテットの演奏を予定していましたが、管楽器の使用は控えてほしいという市当局の要請により、キーボードのみの演奏となりました。

### 佐藤洋祐先生のプロフィール

東京都出身、ジャズミュージシャン、サクソ・フルート・クラリネット プレーヤー、シンガー、作曲家、アレンジャー、教育者。大学卒業後にアルトサクソを手にし、数年後にプロとして北海道札幌市を拠点に演奏活動を始める。

その後 2008 年に渡米しニューヨークにて盛んに活動、特に男性ボーカリスト、グレゴリー・ポーターの 5 人編成バンドにおいて唯一の管楽器奏者として在籍し、彼の 4 枚のアルバムに参加。2011 年度から 2016 年度までの間にグラミー賞を 2 度受賞、ノミネートも 4 度果たした。これまでにモントリオール・フェスティバル、プレイボーイ・ジャズ・フェスティバル、モントルー・ジャズ・フェスティバル、モンレー・ジャズ・フェスティバルなど、数百にも上る世界各国のジャズ・フェスティバル等に参加、サクソ奏者として世界的に非常に高い評価を得た。

その後 2015 年末に同バンドを離れ、自己の音楽を追求すべく米国から日本の千葉県佐倉市に拠点を移し現在に至る。日本国内での音楽活動および海外でのジャズ・フェスティバルやレコーディングなどにも積極的に参加している。

尚美ミュージックカレッジ非常勤講師

**【主な参加、出版音楽アルバム】**

**「米国」**

Water(Gregory Poter) 平成 22 年 5 月発売 Motema Music

Be good(Gregory Poter) 平成 24 年 2 月発売 Motema Music

Liquid Spirit(Gregory Poter) 平成 25 年 9 月発売 Blue note (Universal Music)

Take me to the Alley(Gregory Poter) 平成 28 年 5 月発売 Blue note (Universal Music)

**「国内」**

Furusato (リーダーアルバム) 平成 30 年 4 月発売 Mocloud Records スウェーデン録音

SK4 Blues (参加アルバム) 平成 30 年 4 月発売 BS Jazz Support

E-hina (参加アルバム) 平成 30 年 7 月発売 BS Jazz Support